

---

&quot;灯&quot; **私が見た東日本大震災**

八女倉 環

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

”灯” 私が見た東日本大震災

### 【Nコード】

N6344R

### 【作者名】

八女倉 環

### 【あらすじ】

忘れられない大災害。

あの時、私が見たものは 。

東日本大震災を経験した私の視点で、震災からの数日間を見ます。

比較的被害の小さな地域でしたが、被災中です。更新が滞る可能性も十分ありますのでご了承ください。

出来る限り、私が見たもの感じたものを、そのまま文章にします。

〈回想〉 3月14日 月曜日

小学校から母の実家へと続く緩やかな坂道は、暖かな陽射しに包まれていた。いつもは殆ど誰とも擦れ違わないが、ここ何日間かは人通りが多い。殆どが老人だったが、若い女性、幼い子供を連れたい人、小学生、高校生など、歳は様々だった。唯一共通しているのは、その誰もがペットボトルやポリタンク等の容器を持っているということ。坂を下る者は空のものを、そして上る者は、一杯に水が入ったものを。まだ正午にもなっていないが、行き交う人は様々な表情を見せながら、自らのため家族のために働いていた。

水は、小学校より更に少し下ったところにある中学校から運ばれるものだった。私がそこを卒業する年に、校庭に貯水槽をつくる工事が始まっていた。知らぬ間に完成していたのか。私の母校は、今や人々が命と生活を守るために訪れる場所となっていた。

幸い、私の家は水が使えた。電気も、夜中に復旧したし、ガスもプロパンなので今供給されている分だけは残っている。なので、朝から母の実家に湯を沸かして届けた。伯母が、祖父母にお茶を淹れるから欲しいと言ったからだ。今はその帰り道、母が運転する軽自動車に乗り、ゆっくりと狭い道路を下っていた。

時間は、あくまでゆっくりと流れていた。

大量のペットボトルを抱えながら笑顔で立ち話をしている人を見て、私は3日前のあの出来事を思い出していた。一見平和なこの光景からは想像し難い、あの大惨事のことを。

あの出来事が起こる直前までは、こんな青空が広がっていたことを思い出しながら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6344r/>

---

"灯" 私が見た東日本大震災

2011年10月8日15時42分発行